



—湾岸・アラビア半島ニュース—

イエメン：サナアでの日本人外交官襲撃事件

2013年12月15日朝（現地時間）、イエメンの首都サナアで日本大使館に勤務する外交官が襲撃され、車両を奪われた上刃物で切りつけられて負傷する事件が発生した。被害者は負傷したものの命に別条はなく、連れ去られることもなかった。イエメンでは、外国人の誘拐事件が度々発生しており、そのうち一部は「アラビア半島のアル=カーイダ」による外国の外交官誘拐事件（2012年3月にアデンでサウジの外交官が誘拐された）のような事件である。今般の事件についても、イスラーム過激派の犯行の可能性を完全に否定するわけにはいかないが、中東調査会イスラーム過激派モニター班の調べによると、2013年12月16日午前10時（日本時間）の時点では、犯行声明に類する文書や、イスラーム過激派のシンパによる見るべき書き込みは存在しない。

イスラーム過激派、特に「アラビア半島のアル=カーイダ」が何がしかの政治的な意図をもって日本の外交官を襲撃した場合が最も警戒すべきものである。しかし、同派は14日、15日に相次いで広報映像を発表したものの、一つは外部から移動してきた同胞とそれを受け入れる支援者について論じる教学的性質が強い論説だった。また、もう一つはイエメン軍がアメリカの手先になり下がったと主張し、これまでのイエメン軍に対する捕虜の確保・悔悟させた上釈放、との同派の作戦やイエメン軍の兵士に対する対応に関する宣伝映像だった。また、12日にはサナアで自動車爆弾攻撃が行われるとのデマが広まり、同地に駐在する国連事務所が閉鎖されたが、この場合取りざたされた攻撃の手法も、自動車爆弾攻撃であり、外交官や外国人の誘拐ではない。すなわち、現時点で「アラビア半島のアル=カーイダ」が、組織の闘争方針として日本をはじめとする諸外国の外交団、および国民の拉致・襲撃に興味を示している兆候は見られないのである。

襲撃事件が発生した以上、従来以上にイエメン在住の邦人の安全対策が必要となることは言うまでもない。また、今後、「アラビア半島のアル=カーイダ」がこの事件に言及する声明などを発表する可能性を完全に否定することはできない。しかし、現時点では同派の関心が外交団・外国人に寄せられていることを示す材料は観察されていない。それ故、現時点で最も警戒すべきなのは、今般の事件が日本で大きく取り上げられ、日本人や日本権益に対する攻撃が、「アラビア半島のアル=カーイダ」をはじめとするイスラーム過激派とその他犯罪集団にとって、自らの政治目的や要求を実現する上で「役に立つ」もの、と認識されることであろう。

（イスラーム過激派モニター班）